



### <自己紹介>

2023年度4次隊／コミュニティ開発隊員として、南部アフリカ・ボツワナで活動している井上日南子です。現地語のツワナ語で「セトウーニャ」（意味は「花」）という名前をもらいました。

### <ボツワナ人が抱く日本の印象>

ボツワナの人々は、日本にどんな印象を持っているのでしょうか？



日本の約1.5倍の国土を持ちながら、人口はわずか250万人(日本の約1/50)と、広大な土地に人がまばらに暮らすボツワナ。

ボツワナには現在64人の日本人が住んでおり、その半数は協力隊をはじめとするJICA関係者です。一方で、中国人は約1万人も住んでいるそうで、多くのボツワナ人はアジア人を見ると「チャイナ!」と声をかけてきます。田舎の村にも「チャイナショップ」と呼ばれる日用雑貨店があり、私も「ビジネスをしているのか?」と聞かれることがよくあります。

日本の印象は薄いのかな?と思っていたのですが、『自動車』と『空手』は日本のものとして強く認識されているようです。

ボツワナでは日本の中古車が多く走っていて、車のカーナビに登録された日本の楽曲を耳にすることもあります。また、空手は人気のスポーツで、都市部では習い事として通っている人もいます。

### <日本文化の紹介>

これまでに職場やイベントで、茶道や習字など日本の文化を紹介してきました。日本食を振る舞ったこともあります。あまり馴染みのない文化ということもあり、現地の人たちは興味津々でした。



▲お箸に苦戦する同僚たち

ボツワナの食事は、基本的にワンプレートで提供されます。日本では小鉢や小皿に分けて盛りつける文化があると伝えると、「洗い物が大変だね!」と言われてしまいました(笑)

ボツワナの伝統衣装といえば、「レティシ」と呼ばれる布から作られた服です。アフリカ布というカラフルな柄を思い浮かべがちですが、ボツワナのレティシは、落ち着いた色合いや模様が特徴です。村には仕立て屋さんがいて、生地を持ち込んでデザインを伝え、採寸して丁寧に仕立ててくれます。

日本の伝統衣装である着物を披露した際、着付けに1時間近くかかったと話す、みんなとても驚いていました。

日本のことを話して驚かれることもあれば、ボツワナの文化を体験して驚くこともあり、文化交流の面白さを実感しています。

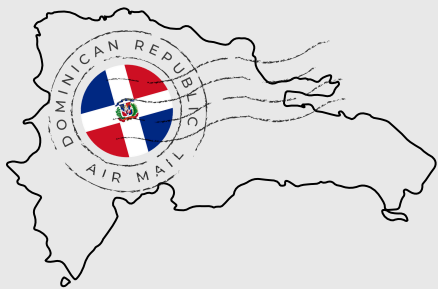


▲高タンパクの蛾の幼虫はおかずの一つ



▲首都のイベントにて茶道を披露





# ドミニカ共和国便り

カリブ海に浮かぶイスパニョーラ島の東側に位置するドミニカ共和国。今回は葬儀事情について取り上げます。



## ドミニカ共和国の葬儀事情

先日、娘（よりも孫？）のように接してくれていた近所のおばあちゃんが遠い世界へ旅立されました。95歳でした。亡くなる直前まで自分の足で歩き、よく食べ、よく笑う姿に私もいつも元気をもらっていました。自宅の寝室で家族に見守られ、幸せな最期だったと思います。

ドミニカ共和国では、故人は棺に入れられ、自宅に1日ほど安置されます。神棚がある家は少なく、多くの場合リビングや玄関口などに故人の写真や家族の写真や沢山飾って故人を偲びます。通夜は親族だけでなく、訃報を聞いて集まった近隣住民が最期の挨拶のためひっきりなしに出入りし、自宅前には大きな白いテントが設置され、コーヒーやラム酒が振舞われ、何時間もお喋りをして過ごします。

翌日、霊柩車ならぬ口バで棺が移送される後を、親族や近隣住民が参列し近くの墓地まで歩きます。埋葬後、novenario（ノベナリオ）と呼ばれる9日間の喪に服す期間があり、地域の教会で追悼ミサが行われたりします。喪中の9日間は、3日間の悲嘆（泣いたり思い出したりすること）、3日間の沈黙（考え、畏敬の念を抱く）、最後の3日間は解放（受け入れ、別れる）という意味があり、キリスト教の古い習慣から来ています。最近では、ローマ教皇フランシスコの冥福をお祈りする「9日間の祈り」がニュースでも取り上げられていました。

農村部ではまだこのような伝統的な葬儀が主流ですが、都市化が進み、家族の形態も変化する中で、葬儀場（funeraria）で行うケースも増えてきているようです。また、こうした葬儀費用の遺族の負担を軽減するため「葬儀保険」を扱う民間の保険会社も存在しているほか、都市部では墓地のスペース不足の問題から、土葬よりも火葬を選ぶ家庭が増えてきているという記事もありました。伝統的なカトリックが多い地域では抵抗が強く、一般的にはまだ普及していないものの、宗教的な価値観も若い世代では徐々に薄れつつあるのかもしれません。



日本の葬儀もひと昔前までは自宅で地域の人が集まって行われていたようですが、いつの間にか斎場へと移り、葬儀業者に依頼して行うものになっていきました。ドミニカ共和国で経験したお葬式では、親族や地域の人々が協力し、故人を送り出す姿に感銘を受けつつ、この国もまた変化していつてしまうことへ少し寂しさも覚えました。



### <プロフィール>

重村 瑞穂（しげむら みずほ）1991年、京都市左京区生まれ。学生時代まで京都で過ごし、その後、電機メーカーに7年間勤務。2024年5月より、JICA海外協力隊としてドミニカ共和国で小規模農家の収入向上と地域活性化に向けて活動中。好きな場所は鴨川と哲学の道。





ブラジル便り

地球の裏側から

# Olá(オラ)! Tudo(トゥド) Bem(ベン)?

(こんにちは! お元気ですか?)

【プロフィール】 氏名：森岡弘子  
日系社会海外協力隊

隊次：2022年度 3次隊  
職種：日本語教師  
派遣国：ブラジル



↑日本カフェ。右の写真はその入口で、浴衣を着た生徒が案内しました。

↓金魚すくい



↑「難しい!」といいながら、漢字の意味を聞いて、選ぶ人も多いです。今年は、「花」と「和」



↑組紐



↑婦人部のお弁当販売

ブラジル(サンパウロ)にも冬がやってきました。気温が1度台になることはほとんど無いので、多くの家には暖房器具はないそうです。もちろん私の住むアパートにも。寒い時は「服の重ね着」でしのいでいます。(エアコンも一般家庭にはなく、エコな生活です(^^;))

今回は「ブラジルの中の日本」です。「学校文化祭」と聞けばどんなイメージですか? 小学校から大学まで、多くの学校がやっていて、だいたいイメージはもっておられると思います。ブラジル(サンパウロ)の学校は、半日で授業が終わるため、特別活動的なものではなく、「文化祭」のようなものもないそうです。だから、本校で文化祭が始まったきっかけは、生徒が日本の漫画にのっていた「文化祭」にあこがれて始まったそうで、この取組で初めて知る人がほとんどです。「日本文化紹介」が目的で、今年、生徒達が一番力を

入れたのが「日本調カフェ」でした。提灯(ちょうちん)、鯉のぼり、浮世絵が飾られ、餃子(ぎょうざ)、肉まん、まんじゅうなどを浴衣、法被(はっぴ)を着た生徒達が運びました。

外の屋台は、日本食(巻き寿司、おにぎり、たこ焼き、日本製の菓子など)を売る店が中心で、日本食ブームの関係もあり、これを目当てにやってくる街の人も多いです。文化紹介の活動は書道、茶道、組紐体験をして、金魚(鯉もいる)すくいはとても人気でした。私が、地味にがんばったのは、ゴミの分別です。ブラジルでも、ゴミの分別が始まっているのですが、まだなかなか浸透していないので、缶とペットボトルの分別容器を用意し表示もしました。結果は、きちんと分別してくれていて、うれしかったです。

## カラオケが大人気

「Karaoke(カラオケ)」という呼び方が定着するぐらい、カラオケは、元祖日本! 日系の人は特に大好きです。アチバイア市で行われたカラオケ大会には、ブラジル人も多く参加して熱唱。普段は、いろんなジャンルの歌を歌うこともあるそうですが、大会ではほぼ「演歌」でした。その理由は「歌詞の意味を大切にしているので、演歌が一番心に響く」そうです。歌う時は、ものすごくきれいな発音で、(司会者のポルトガル語以外)会場内は「日本」でした。



Por(ポル) favor(ファヴォール)  
(おねがいします)

Obrigado(オブリガード)  
(ありがとう)



着物を着て歌う人も



## 家族や隣人を大切にするキルギスの冠婚葬祭

【自己紹介】神戸市出身、京都市在住。管理栄養士として保健所、病院で勤務。その後、京都市、島根県の大学にて、管理栄養士養成に携わる。栄養士としての経験を海外で活かせるか？若き頃の夢を叶えるために、キルギスでの健康づくりに向けて活動中！

みなさま こんにちは！2023年度4次隊の今中美栄です。キルギスに派遣されて1年が経ちました。当初は、毎日がドキドキしていて、一日がとても長かったように記憶しています。お陰様で良い仲間恵まれ、たくさんの経験をさせていただいています。今回は、キルギスの祝いごとや冠婚葬祭の様子をご紹介します。

### 【花束で祝うキルギスの祝福スタイル】

キルギスは記念日をとても大切にしています。お祝いの基本は花束です。街のあちこちに24時間オープンな花屋さんが並んでいます。花束を抱えた人たちのほかにかんだ笑顔がとても美しく、なんともステキです♡

### 【親族・隣人を招き、夜中まで続く結婚式】

キルギスの結婚式は、とても華やかです。式場の天井は藤のような花で埋め尽くされ、ライトアップされた会場はとても幻想的。

クライマックスは、正装したスタッフが、キルギスの伝統料理「ベシバルマック（羊肉のバスタ）」を高々と頭上に掲げて花道に整列します。最後は、羊の頭が登場！この儀式的な演出には圧倒されました。遊牧民族にとって、羊の肉がどれほど貴重であったかを改めて感じた瞬間でした。



### 【悲しみをそのまま表すお葬式】

一方で、悲しい知らせに寄り添う機会もありました。両親思いの同僚のお父様がお亡くなりになったのです。長く患っておられましたが、同僚から「大好きな父親だ」と、お父様のことをよく伺ってありました。

お葬式では、実家の庭に建てられたユルタ（遊牧生活の移動式の家）の中に、お父様が安置され、女性の家族たちがその隣に座して、弔問客を迎えました。

女性たちは声を上げて、愛する家族との別れを嘆き悲しみ、男性の家族は、外で、ユルタの壁に掛けられた父の写真に向かって、悲しみの歌を叫んでいます。どちらも悲しみが心に響く声でした。

キルギスの仲間として接してくださっているみなさまに感謝とともに、あと一年を大切に過ごしたいと思います。







## JICA海外協力隊現地レポート

### Vol.5 : あっという間の1年

#### 【自己紹介】

**岸本光太郎** 京都市出身

隊次：2023年度4次隊

職種：青少年活動

派遣国：マダガスカル

こんにちは！任地では「人々の生活にプラス1」を意識して、日々の活動を行っています。



JICA海外協力隊として活動を始めてから、気づけば一年が経ちました。

この一年、本当にあっという間でしたが、日々新しいことに挑戦するなかで、少しずつ自分の成長を実感できるようになりました。

私の活動の柱は、町の青少年と配属先である青年の家をつなぐことです。

そのために学校を巡回して日本文化を紹介したり、日本語教室を開いたりして、青少年が気軽に青年の家に足を運べるきっかけを作ってきました。

というのも、私の住む町では、若者たちが余暇を楽しんだり、新しいことに挑戦できる場がまだ十分に整っていません。

少しでも多くの青少年が自分の居場所を見つけ、学びや遊びを通して前向きな体験ができるようになればと思いながら活動しています。

配属先の青年の家は、公園のように気軽にスポーツをしたり、友達と遊んだりできる場所がたくさんあります。

しかし実際に活用しているのは、団体スポーツを行う大人や、有料クラブに所属する若者が中心です。

それも悪いことではありませんが、私はもっと多くの青少年が「ちょっと遊びに行こう」と思える場所にしていきたいのです。

これからも初心を忘れず、自分にできることを一つひとつ丁寧に続けていきたいと思っています。



## 【プロフィール】

名前：鋤田早紀（くわたさき）

隊次：2023年度4次隊

派遣国：タイ

職種：日本語教育

## KOCA現地隊員レポート Vol.2

# マイペンライフ

秋の紅葉で有名な東福寺の近くで生まれ育ちました。四季が美しい日本から一転、昨年5月から常夏の国・タイでの生活が始まり、冒険の毎日を送っています。タイでは中高一貫校で日本語を教えています。

「タイを代表するお祭りは何ですか？」と聞くと、ほとんどのタイ人が「ソンクラーン」と答えます。「ソンクラーン」は、一年の中で一番暑さが厳しい4月のタイ正月に行われるタイの伝統的なお祭りです。仏像や年長者の手に水を掛けてお清めする伝統的な風習がありますが、近年はそれが転じて、街で通行人同士が水を掛け合って楽しむようになり、「水掛け祭り」としても知られています。楽しいソンクラーンの時は微笑みの国・タイならではの2つのルールがあります。ひとつ目は、警察官とお坊さんには水を掛けてはいけないこと。ふたつ目は、いきなり水を掛けられても怒ってはいけないこと。



▲ゾウも一緒に水掛けする様子

ソンクラーンに備えて、おすすめソンクラーンスポットを聞き出し、水着を服の中に着込んで水鉄砲を購入し、いざ出陣！街中に到着すると、もうそこは水浸し天国。外国人だろうが、女性だろうが、男性だろうが、動物だろうが関係なし。屋台の人や子どもも容赦なしに水を掛けてきます。5分も経てば、頭からつま先までずぶ濡れになっていました。ほとんどの人はアロハシャツを着ていますが、LGBTQ+の方々は自分が着たい服で、ありがたい姿で参加しているのも印象的でした。タイ象徴の動物であるゾウは可愛くお化粧をして、器用に長い鼻をホースのように使って水を吸い上げて噴水のように人々に水を掛けて楽しそうにしていました。初めてのタイのソンクラーン。老若男女関わらず動物も人間も一緒になって水を掛け合い、新しい一年をお祝いして、またひとつタイのことを学びました！



◀ 思い思いのコスチュームを着てパレードに参加する人々



◀ ソンクラーンの時の仏像



▲ 白い粉（ディンソーポン）を塗られた時



## 第1話 『無力さから始まったぼくの協力隊活動』



### 【自己紹介】

吉井大河（2023年度3次隊/ベナン/コミュニティ開発）  
オーストラリアでの農業ボランティアをきっかけに、世界の多様な価値観に惹かれました。現在はベナンで観光農業活動に取り組み、日々の失敗から学びながら活動しています。そんな現地での気づきを少しずつ言葉にしていきます。

ぼくには専門性がありません。でも、経歴は人それぞれ。「自分だからこそこできること」は、どんな場所にもあると信じています。それは、たとえ途上国であっても、きっと何かあるはず。そう思って、協力隊へ応募しました。

配属されたのは、西アフリカのベナン共和国。職種はコミュニティ開発で、農家の収入向上に関わる案件です。ただ、派遣前に与えられる情報はごく限られていて、町の様子も仕事の内容も、正直ほとんどわからないまま現地に向かいました。

実際の現場に入って驚いたのは、職場の人たちの期待でした。「自由に動くボランティア」ではなく、「同僚として仕事を任せられる人」として見られていたのです。ぼくには農業の専門知識もなく、何をどうすれば良いのかまったくわかりません。最初の数ヶ月は、無力感に悩まされました。

協力隊活動は、「思っていたのと違う」の連続です。だからこそ問われるのは、そこで立ち止まるのか、それとも別の道を探すのかという選択。ぼくは、自分にできることを一から考え直し、地域の農家と一緒に観光農業の立ち上げに挑戦することにしました。

自分にできることは小さいかもしれない。でも、だからこそ見える景色があり、誰かと一緒に何かを始める面白さがあります。

今は、たくさんの失敗や壁に感謝しています。困難があるからこそ、成長がある。だからこそ、協力隊になって本当に良かったと心から思っています。

以上です。ありがとうございました。次回は、「何もできない日の価値」について書いてみようと思います。



★自己紹介★

名前：祖父江なつみ（あだ名はソフィー）  
隊次：2024年度2次隊  
派遣国：ベナン  
職種：コミュニティ開発  
京都との関わり：母が京都出身。転勤族だったため、小6～高3までの青春時代（7年間）を堀川丸太町と岡崎で過ごしました。



Bonjour!! 皆さんはじめまして。今月号から西アフリカのベナンでの活動や生活について4回にわたって紹介します！少しでもベナンのことを知ってもらえるきっかけになれば嬉しいです。



～2024.11 ベナンに到着！～

成田空港からタイ、エチオピアを経由し約24時間かけてベナンに到着しました。日本は肌寒くなっていた頃だったので、厚手の長袖を着ていたのですがこれが大失敗（笑）。とても暑くてベナンの空港に着いてから汗が止まりませんでした。

学生時代にタンザニアに渡航したことがあり、飛行機の窓から見るタンザニアの景色とベナンの景色を比べることができました。タンザニアは高層ビルが立ち並んでいて、「ボランティアは本当に必要なのか？」と感じましたが、ベナンはまだこれから発展するだろうというこじんまりした街並みが印象的でした。

～2024.12 地方都市アボメカラビでのフランス語研修&ホームステイ！～

ベナンに到着して2週間後、JICAベナン支所があるコトヌーから車で約30分の場所にある地方都市アボメカラビに移動し、フランス語研修とホームステイ体験がありました。フランス語で活動先へ挨拶する練習やベナンの教育制度などに関して学びました。ホームステイでは、我が子のように可愛がってくれる家族と過ごし、とても楽しかったです。初日に作ってくれたベナン食「ブイ」というとうもろこしのおかゆだけがどうしても口に合わず、苦戦したことも今になってはいい思い出です（笑）。





## 読書を通して、ヒーローになれる。

## エピソード12

## ビブリオバトルはまちづくり？

益井博史さんによる連載企画「読書を通して、ヒーローになれる。」第12回をお届けします。  
益井さんがビブリオバトルに出会ってから現在に至るまでの活動、ビブリオバトルってどんなことをするの？その魅力とは！  
など、様々な視点からお伝えしていきます。



## 【自己紹介】

益井 博史（Masui Hirofumi）

- ・ 青年海外協力隊2015（H27）年度3次隊／青少年活動／ソロモン
- ・ 一般社団法人ビブリオバトル協会 特別協力員
- ・ ビブリオバトル普及委員会 理事
- ・ 大学卒業後、まちづくり会社を経て青年海外協力隊に。  
帰国後、ビブリオバトル考案者の研究室で論文執筆や大会運営に携わる。
- ・ 著書『ソロモン諸島でビブリオバトル』（子どもの未来社）
- ・ 最近の趣味：サウナめぐり、ボードゲーム



商店街でビブリオバトル

（前回までのあらすじ）

就活をしたくなさすぎる著者は、声をかけられるままに就職先を決めてしまいました。

僕が勤めるのは雑貨屋だと思っていたが、どうやらそれは表向きの顔に過ぎなかったようだ。  
坂本龍馬が伏見奉行所の役人に襲撃されたことで有名な宿屋、「寺田屋」の真向かいに店舗を構えるその会社は、地域のまち歩きツアーや手づくり市運営、商店街振興などを手掛ける「**伏見のまちづくり企業**」だった。輸入物の雑貨が並ぶ中、10人ほどのスタッフが日々企画を練ったりせっと準備したりしていた。

「まちづくり」という言葉は、「**わかるようでわからないワードランキング**」があればかなり上位に食い込むだろう。町内会や地域のお祭り、防災訓練なんかをイメージする人が多いかもしれない。この会社では、「**まちの人なら誰でもアクセスできるコンテンツづくりと、それを運営できるコミュニティづくり**」くらいの広い意味合いで使っているようだった。

そんなまちづくりを民間企業の事業として成立させるべく奔走していたのが、僕に声をかけてくれた社長だったわけだ。

考えてみると、僕が開催していたビブリオバトルはまさにまちづくりだった。希望すれば誰でも参加可能で、参加者はゲームを通して未知の面白い本や魅力的な個性に出会うことができ、それを数人の学生がゆるっと運営していた。

事実、**この会社の企画とビブリオバトルはとても相性が良かった**。僕はまち歩きツアー中や、商店街の中、桃（伏見にはかつてたくさん桃の木が植えられていた）を使ったスイーツのイベントなどで、ビブリオバトルを開催した。それぞれ本と何の関係があるの？と思われるかもしれないが、**ビブリオバトルでは本のテーマを自由に設定できるので、桃のイベントなら「桃」をテーマに本を持ってきてもらうなど、どんな企画にも当てはめられる便利コンテンツ**なのだ。

おっかなびっくり社会人になった僕だったが、仕事という大義名分を得て、むしろますますビブリオバトル運営に精を出していた。

仕事のほか「ビブリオバトルふしみ」として月に一度の定期開催も継続していたので、「ビブリオバトルふしみ」の参加者が仕事のイベントにも参加してくれたり、仕事で関わった人が「ビブリオバトルふしみ」に来てくれたり、明らかに**良い相乗効果**が生まれていた。

こういう風に書いてみると、僕が就職早々優秀な社会人になったかと勘違いする方もいるかもしれないけど、別に全然そんなことはなかった。僕の考える企画は基本的に**全くコストに見合っていなかった**のだ。たとえば「**エコストーブ（ロケットストーブ）**」と呼ばれる**燃焼効率の良いストーブ**を作って、**伏見の里山で取れたものを焼いて食べたい！**という企画を考えたのだが、明らかに時間と労力を考えると参加費がちょっとした旅行ができるくらいの額になってしまっていた。僕の頭には**コストという概念がなかった**（でもこの企画は結局社長が他団体とコラボすることで低価格で実現させてくれた。楽しかった。ありがたや）。

こんな仕事なので、自然と交流する人の数は増えていった。イベントに参加したり運営したりする人は、どこか明るい人が多い。ある程度の気持ちの余裕がないと、そもそもイベントに携わることもないからだろう。そんな中でも、僕は**とりわけ場を楽しむことやコミュニケーションが上手な人たちに、ある共通点がある**ことに気づいた。それは、彼らが**青年海外協力隊の経験者**だということだった。（次回に続く）

今回の一冊：『**モテるまちづくり**』（谷 亮治／まち飯叢書）

本文にも書いたけど、「まちづくり」という言葉はわかるようでよくわからない。道路や水道などのインフラ整備はもちろん、施設の誘致、伝統的なお祭り、公園清掃やおしゃれな服を着ることだって、まちづくりと言える気がする。本書は、そんなまちづくりという概念を整理し、なぜ「まちづくりに疲れた人」が生まれてしまうのか、そしてその処方箋となる「モテるまちづくり理論」を提案する名著。ぜひ読んで！

# 総会報告

## 総会の開催

令和7年度の通常総会は、令和7年5月17日（土）午前、京都駅前のキャンパスプラザ京都にて、オンラインとのハイブリッドで開催しました。

午前10時30分開催し、まずは、亀村会長がスライド上映して、令和6年度の活動を説明しました。その後、総会議事を進行。亀村会長が議長に選任され、令和6年度事業報告と決算、令和7年度の事業計画と予算を審議し、全ての議案が全員一致で承認されました。

総会終了後は、ランチ交流会を開催しました。どうしても都合がつかなかった方とお別れして、京都駅前の居酒屋へ移動。それぞれ好きなものを注文して、楽しく交流できました。



JICA関西



いつか世界を変える力になる

**JICA**  
海外協力隊



JICA海外協力隊事業については、JICAホームページをご覧ください。

KOCAネット（メーリングリスト）は、各種行事の案内や登録者相互の情報交換・コミュニケーションを図る場として運営しています。登録ご希望の方は、[office@koca.or.jp](mailto:office@koca.or.jp)にメールを送り、お名前とメールアドレスをお伝えください。

KOCAの情報は、ホームページ、Facebook、Instagramで随時配信しています。

**HP**

**Facebook**

**Instagram** も見てね！



KOCAは、京都府在住のJICA国際協力ボランティア事業への参加経験者を中心とした組織です。国際協力活動で得た貴重な体験を生かして、異文化理解の促進、地域の国際化と国際理解のために様々な活動を展開しています。

編集・発行 特定非営利活動法人 京都海外協力協会（KOCA）

〒600-8127 京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83番地の1  
ひと・まち交流会館 京都 2階 京都市市民活動総合センター  
PO.BOX NO.27